

社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析 (X)

—第6学年単元「日本の財政のはたらき～消費増税あなたならどうする!?～」の場合—

Development and Analysis of Social Studies Lesson for Promoting the Reading Literacy of Society (X): In the Case of “the Functions of Japan’s Financial～What Do You Think when the Consumption Tax Increases!?～” in the 6th Grade.

關 浩 和* 吉 水 裕 也** 山 内 敏 男*** 福 田 喜 彦****
SEKI Hirokazu YOSHIMIZU Hiroya YAMAUCHI Toshio FUKUDA Yoshihiko
森 清 成***** 吉 田 繁 之***** 柴 田 映 里*****
MORI Kiyonari YOSHIDA Shigeyuki SHIBATA Eri
小 寺 研***** 土 松 拓 生*****
KODERA Kei TSUCHIMATSU Takuo

本研究は、社会科授業の開発と分析を通して、「社会科固有の読解力」とは何かを解明しようとするものである。本研究を始めるにあたり、「社会科固有の読解力」について、次の仮説を立てている。

- (1) 社会科固有の読解力は、対象に即した科学的理論をベースにして形成される。
- (2) 社会科固有の読解力は、専心的な体験・表現活動ではなく、分析的な探究活動を通して形成される。
- (3) 社会科固有の読解力により形成される認識は、主観的知識の増殖ではなく、客観的知識の成長である。

上記の仮説に基づき、最終年度としている今年度は、第6学年単元「日本の財政のはたらき～消費増税あなたならどうする!?～」の開発・実践を行った。日本とハンガリー、デンマークの税制度及び幸福度等の比較を通して、日本における年金や介護、医療などの社会保障、社会資本整備などの課題を解決するための日本の財政のはたらきについて、科学的根拠に基づいた資料と現実生活につなげる資料の読解を試み、教師の期待する読解にほぼ成功した。

キーワード：小学校社会科、読解力、財政、社会保障、消費増税

1 問題の所在

本研究は、社会科固有の読解力形成のあり方を探るものである。大学と附属学校の連携による社会科授業研究は、テーマを「社会科固有の読解力形成のための授業構成と実践分析」として進めている。

昨年度は、第5学年単元「わたしたちのくらしと自動車産業」を取り上げ、日本の基幹産業である自動車が最新のテクノロジーを駆使してどのようにつくられているのかという単元構想を行った。その中で、焦点化したのが電気自動車である。高い技術や性能をもった電気自動車なのに、なぜ、あまり普及しないのだろうかという学習問題を設定して、その理由を解明するために、子どもの多様な意見をベースに活発な活動を展開することができた。本実践は、環境適応車であるハイブリッド車(HV)や電気自動車(EV)、燃料電池車(FCV)の中から、電気自動車を取り上げ、普及していない理由として、価格、燃費、充電施設(インフラ整備)の三つの視点を導き出し、社会的現象を関連づけた学習ができたのは一定の評価がなされた。しかし、近年、高齢者の交通

事故は特に深刻な問題となり、事故を軽減するために、メーカー側は、安全な自動車づくりに完全にシフトしている。現状の自動車産業の課題を環境問題のみに集約してしまった単元デザインの課題が指摘された。各メーカーは、事故軽減のために、トヨタセーフティセンス Toyota Safety Sense やスバルのアイサイト・ツーリングアシスト Eye Sight Touring Assist など衝突被害軽減自動ブレーキを含む安全運転支援システムの技術開発にしのぎを削っている現状から、安全問題抜きには、自動車産業の学習は成り立たない。社会科は、単元で創るのがポイントである。この単元で何を子どもが学ぶのかというビジョンを明確にして、中心教材を選定して、単元デザインをしていくセンスが教師には求められる。

そこで、今年度は、昨年度の反省を踏まえて、これまでの研究成果を活かせるように、第6学年単元「日本の財政のはたらき～消費増税あなたならどうする!?～」において、読解力形成過程について、客観的な知識の成長を評価するために、次の手順で研究に取り組むことにした。

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース 教授

平成30年6月28日受理

**兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 教授

***兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 准教授

****兵庫教育大学大学院教科教育実践開発専攻社会系教育コース 准教授 *****兵庫教育大学附属小学校

*****兵庫教育大学附属中学校 *****姫路市教育委員会 *****岐阜県多治見市立精華小学校

- ①「日本の財政のはたらき～消費増税あなたならどうする!?～」の単元を設定し、経験を引き出す段階・根拠を明確にする段階・現実生活につなげる段階を設定し単元構成を共同で立案する。
- ②本研究の中心教材として、日本とハンガリー、デンマークの税制のしくみを比較する。その際の視点として、国債、社会福祉（年金、医療、介護）、教育の三つの観点で資料を収集するとともに、税金と幸福度の関係性を探るための資料を収集する。
- ③授業実践の過程は、子どもの読解の過程がたどれるように、子ども自身の考えを表現させ、ワークシート（授業記録）をポートフォリオ的に保存する。
- ④教師は、プリント配布資料の読み解き過程と子どものワークシートを質と量の両面から分析し、読解の成長過程を把握し、評価する。
- ⑤読解力形成のための授業構成を評価し、次の実践に活かせるようにする。（關 浩和）

2 授業構成のねらいと実際

2.1 教材解釈

国会や議会は、国民が所得や消費に応じて支払っている税金を基にして、年金・医療・介護などの社会保障、水道・道路などの社会資本整備、教育、警察、消防や防衛といった生活における課題を解決するために予算を立てている。

現在、税金についての問題は数多くある。特に税金の使途に関する問題は山積され、少子高齢社会による年金問題・医療・介護問題や、国債費の問題など様々である。近年、国会においてそれらの問題を解決するために2019年10月より消費税が8%から10%へ引き上げられることが議決されている。さらに、新たに国際観光客税や森林環境税が創設され、たばこ税、酒税などが増税されるという立案もある。政治に関するFNNの世論調査⁽¹⁾によると、消費税率の10%引き上げについて、肯定派が過半数を占めている（2016年7月16日・17日、全国1,000人を対象にアンケート）。2019年10月の消費税率10%への引き上げに「賛成」と答えた人は、53.6%、「反対」は40.8%だった。それぞれの意見を聞いてみると「今の保障を続けていくなら、消費増税をするしかない」、「ヨーロッパの国々はもっと高い税を取っている」などの賛成意見に対して、消費者は「どんどん消費税が高くなって、買う時の料金も増えるから困る」、生産者は「消費税が8%になって、売り上げが減少して困っているのに、10%になったらやっつけいけない」など、生活者の困り感に基づいている。

また、日本だけでなく世界に目を向けてみると、高い消費税の国がある。特にハンガリーは27%の消費税率で世界1位である。また、デンマークは25%の消費税率である。しかし、ハンガリーとデンマークの幸福度ランキングを見ると、ハンガリーは世界75位であるのに対し、デンマークは5年連続3位以内に入っている。

ハンガリーの幸福度が低い理由としては、政治の不安

定さや、公務員の多さなどから財政難の状況で、あらゆる面で増税され、塩分やカロリーの高い食品に課せられる脂肪税（Fat tax）や、犬を飼っている人が納める犬税、電話やインターネットにかかる通信税などが課せられ、それらの税が国民に還元されている実感のない状態が続いていることが挙げられる。一方、デンマークの幸福度が高い理由は、教育費、医療費などが無料で、育児制度や失業手当制度も充実しており、国民が政治に対して高い関心を持ち、税金の使途も厳しくチェックしているためだと言われている⁽²⁾。これらの事例と日本の税金の使途とを比較しながら、関連付けることで、多面的・多角的なものごとを見る力がつくと考えた。以上のことを踏まえ、本単元での指導ポイントは二点ある。

一つ目は、子どもに身近な税である消費税の増税に焦点を当てることである。税の中で、子どもにとって一番身近なものは消費税である。その消費税が増税されると聞けば、きっと子どもたちは問題意識をもつだろう。そこで、子どもたちが消費増税の是非を考えるよう働きかける。さらに、消費増税を回避する方法を考えたり、増税した分の税収の使途を考えたりできるようにした。

二つ目は、日本と世界の税制のしくみを比較する際の視点を明確にすることである。①国債②社会福祉（年金、医療、介護）③教育の三つを視点として財政を見ることで、日本とハンガリー及びデンマークの世界の税制と比べた際に、日本の財政のはたらきの特徴が見えやすくなると考えた。

2.2 単元の指導計画

2.2.1 単元名

日本の財政のはたらき
～消費増税あなたならどうする!?～

2.2.2 単元の目標

日本の財政のはたらきについて、日本の税制度とハンガリー、デンマークの税制度を比較することを通して、国会や議会は、国民が所得や消費に応じて支払っている税金を基にして、年金・医療・介護などの社会福祉、水道・道路などの社会資本整備、教育、警察、消防や防衛といった生活における課題を解決するために予算が立てられるべきであることがわかる。

2.2.3 単元の評価規準

○国会や議会は、国民が所得や消費に応じて支払っている税金をもとにして、年金・医療・介護などの社会福祉、水道・道路などの社会資本整備、教育、警察、消防や防衛といった生活における課題を解決するために予算を立てていることがわかっている。

【知識・技能】

○国や都道府県や市町村が決める税金の使途に関する資料を集めたり、選んだりして、税の使途に対する自分の考えをもち、日本と海外の税制や政治を比べることで、税や国の特徴について類比・対比したり、関連付けたりして税金の在り方や政治と国民の意識の在り方を考え、伝えることができる。

【思考力、判断力、表現力】

○税金に興味関心をもち、自分たちも主権者として政治にかかわっていかうとしている。

【学びに向かう力、人間性】

2.2.4 単元プラン（全15時間）（表1参照）

2.3 授業の実際

2.3.1 第1次 税金って何？

第1次では子どもたちの税に関する認識を引き出すことを意識した。子どもたちは、税金と聞くとあまりいい

表1 単元プラン（全15時間）

○：1時間 ◎：2時間

	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価の視点
第一次 税金 って 何？ 4時間	<p>○租税教室で税の概要を知る。</p> <p>○6年1組で一週間のうち一番消費税を負担しているのは誰かを知り、消費税の仕組みについて知る。</p> <p>○日本で一番税金を払っている社長はどの会社の社長か考える。 ・どんな税を払っているのだろう ○日本の税収はどのくらいあるのか知る。</p> <p>資料 税収は57兆7120億円 2019年10月から消費税が10%</p>	<p>・身近な税の種類や使途を紹介することで、税金が子どもたちにとって身近に感じられるようにする。</p> <p>・一週間分のレシートを持参させ、誰が一番消費税を払っているのか調べるゲームを通して、税金について興味をもてるようにする。</p> <p>・高額納税者のランキングクイズをすることで、様々な税に興味をもてるようにする。</p> <p>・消費税10%になることを伝えることで、「税収は約58兆円もあるのになぜ増税する必要があるのか」という疑問をもてるようにする。</p>	<p>・税の種類や使途について興味をもっている。</p> <p>・消費税を通して、自分も税金を払っている一員であることに気付いている。</p> <p>・他の税金について調べようとしている。</p> <p>・なぜ増税するのかという疑問をもっている。</p>
第二次 国の 予算の しくみ 6時間	<p>○増税する必要性について考える。 予想 ・税収は約58兆円もあるのになぜ増税するのか ・予算が足りないから ・不景気だから ・少子高齢社会だから ・社会福祉費が増えているから ・国債費がたくさんあるから</p> <p>○国の予算について調べる。</p> <p>○税収約58兆円なのに、予算が96.7兆円なのはなぜか考える。</p> <p>◎本当に増税すべきか討論する。 (税の歳入と歳出) (社会福祉) (教育)</p> <p>○世界の消費税率の高い国ランキングからわかることを交流する。</p>	<p>・増税する必要性について国の予算の資料を見ながら予想を立てることで社会の問題点について考えるきっかけとなるようにする。</p> <p>・パソコンや本などを使って、調べる時間を確保する。</p> <p>・予算について焦点を当てることで社会問題を考えるようにする。</p> <p>・増税を問い直すことで社会問題について焦点化する。</p> <p>・消費税が高い国はどのような国民の意識なのかを幸福度ランキングから探るようにする。</p>	<p>・増税の必要性について社会問題と関連付けながら、考えようとしている。</p> <p>・予想の確認に適した情報を集めている。</p> <p>・資料から読み取ったことをもとに自分の考えをもっている。</p> <p>・増税について自分の考えをもっている。</p> <p>・資料と資料を比べて、「なぜ」と疑問をもち、その理由について考えようとしている。</p>
第三次 日本の 財政に ついて 考える 5時間	<p>○ハンガリーの高い消費税について国民は、どう思っているのか考える。</p> <p>○デンマークは消費税が高いのになぜ幸福度が高いのか予想・検証する。 (社会福祉) (教育) (税の歳入と歳出) 【本時】</p> <p>○保護者や地域の方にインタビューをして、増税に対する意見を集める。</p> <p>◎インタビューしたことや自分の思いをもとに、税金に対する意見文を書き、交流する。</p>	<p>・ハンガリーの税（ポテチ税や犬税、通信税など）について取り上げることで、世界の税について興味をもてるようにする。</p> <p>・税金の使われ方についての資料を提示することで、日本やハンガリーと対比しながら、考えられるようにする。</p> <p>・増税についてインタビューする中で税制や税の使途などについての課題を明確にできるようにする。</p> <p>・自分たちの考えを明確にした上で、税金に対する意見文を書くようにする。</p> <p>・日本の税に対して、自分の意見を持ち、伝えられるように働きかける。</p>	<p>・世界の税について調べようとしている。</p> <p>・税金がどのように使われるべきか考えている。</p> <p>・資料を根拠に自分の考えを伝えている。</p> <p>・自分の考えを意見文にして、表している。</p> <p>・自分の考えをもって意見文を書き、伝えている。</p>

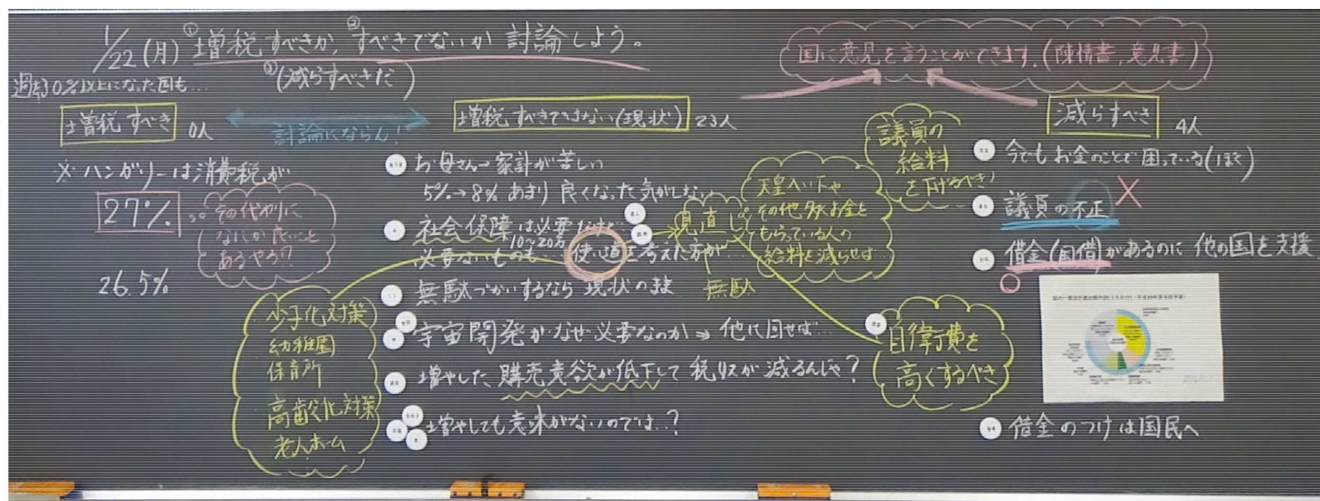


図1 前時の増税の是非を問う授業 板書

印象は受けないようだが、学習を進めていくと、税金によって私たちの生活が豊かになっているということを理解していった。さらに、税金には様々な種類があることを知り、自ら調べる子どももいた。すると、税金には48種類（財務省 Web サイト）もあり、多く税金を納めている人は1兆円近く納めているということを知ると、子どもたちは驚いた。そこで、教師から「もうすぐ増税するらしい。特にみんなに関係しているのは2019年10月に消費税が8%から10%になるそうだと伝え、子どもたちは反発していた。さらに、教師から国会において他にも増税しよう立案として伝えていることを伝えると子どもたちは「今でもたくさんの種類の税があって、税収は57兆7120億円もあるのに、なぜ増税する必要があるのだろう」という疑問が生まれた。つまり、子どもたちは税金が国民の生活のために使われていることを理解しつつも、税金は安い方がよいという認識をもっているということである。

2.3.2 第2次 国の予算のしくみ

第2次では「57兆円も税収があるのに、なぜ増税する必要があるのだろう」の予想から始めた。その予想として、「東京オリンピックがあるから」、「お金がないから」などが出てきた。そこで、教師からは歳入に関する資料を提示した。すると、明らかに歳入と歳出が合っていないことに気付いた。次に出てきた疑問が「なぜこんなに歳入と歳出が合わないのに予算を減らさないのか」ということであった。その疑問について、調べる過程で、子どもたちは少子高齢や国債の問題が税金の増税と深く関わっていることを交流した。具体的には少子高齢社会によって、社会保障費がどんどん上がっていることや子どもが減ると未来の納税者がいなくなってもっと税金が増えることである。このように学習を積み重ねる過程で、

子どもたちに増税すべきか、すべきでないかを問いかけた。すると、増税すべきという意見はおらず、増税すべきでないという意見と逆に減税すべきだという意見の二つに分かれた（図1）。出てきた根拠としては、「家計が苦しい。5%から8%になったが、よくなった気がしない」という家族の困り感を基にする意見や「無駄遣いするんだったら、増やしても意味がない」、「借金があるのに他の国を支援しているのはなぜ」という使途を根拠とする意見などである。さらに、消費税の高い国について調べてきた子どもは「ハンガリーの消費税は27%」ということを知り共有したが、「消費税が高いのは何か良いことがあるからだろう」という予想を立てた。そこから、ハンガリーの税制のヒミツをさぐる時間を次時に設定した。

2.3.3 第3次 日本の財政について考える

子どもたちはハンガリーの消費税が高いのは何かいいことがあるからだ予想していた。しかし、教師から提示した資料により、実際は「脂肪税（Fat tax）」「通信税」などのあらゆる税があり、国民がデモを起こしたこともあるという事実もわかった。このことから、税を高くしても国民のための使途を考えなければ、よりよい税の仕組みとはならないことがわかった。さらに、消費税率と幸福度のランキングの資料を提示すると、デンマークは消費税が25.5%と高いのに、幸福度は常に上位にランクインしていることがわかった。子どもたちは同じように消費税の高いハンガリーとデンマークの実態のずれに疑問をもった。そのずれを利用して、本時では「消費税が高いと国民から不満が多くなりそうなのに、なぜデンマークは国民の幸福度は高いのだろう」という問いを形成し、問題解決を行なった。以下の表2に分析結果を示す。

表2 本時の交流場面におけるTC記録とその分析

TC (T: 教師 C: 子ども) 記録	記録の分析
授業の最初に消費増税についての是非について聞いた。 増税すべき<挙手2人~3人> 増税すべきではない<挙手多数> わからない<挙手5人~6人>	

消費税が高いと国民から不満が多くなりそうなのに、なぜデンマークは国民の幸福度は高いのだろう。

C6：学校のお金とか病院のお金が税金で払われているから、無料になって幸せなんじゃないかな。

C7：自分にとって得なことが多いからだと思う。

T：自分にとって得な事って何？

C7：電車代とかがタダになったら幸せだと思う。

C8：デンマークは多分税金で色々なサービスがまかなわれていると思うから幸せ。

T：どんなサービスがあったら幸せかな？

C8：年金が多いとか、介護が無料

C9：国民が満足するような使い方をしているから満足度が高いと思う。

T：では、実際に資料を使って検証したいと思います。

T：では、まず社会保障の資料から見ましょう。

＜資料1配布＞

＜資料読解＞

T：資料から分かることを教えてください。

C19：日本は消費税が低いわりには、結構サービスは充実している。

C20：デンマークは医療が全て無料である。

C21：デンマークは社会保障がほとんど無料である。

T：じゃあやっぱり合っていたね。

C22：質問で、借金はそれぞれいくらですか

T：借金については歳入と歳出に資料からわかるんじゃないかなと思います。

はい、どうでしょうか。

＜資料2配布＞

T：デンマーククローネはデンマークのお金です。下に日本円になおしています。

マイナスが付いています。

C23：借金ってこと？

T：歳入と歳出があってないってことだね。

C24：消費税のランキングと資料2を照らし合わせると、日本は消費税が少ないから歳入と歳出が合っていないんだと思う。

T：歳入と歳出があってないということは借金しなきゃいけないということになるね。

T：なるほどね。

最後に政府の視点を解決する資料です。

投票率の資料です。

政府と国民との関係性がわかる資料です。

＜資料3配布＞

＜資料読解＞

T：難しいかな…

C25：えっと…デンマークの政府は国民から信頼を得ているから、投票率が高いと思う。

ハンガリーの人は消費税を上げすぎているから、あまり投票率が上がらないと思う。

T：国民が政治に良く関わっているということにつながりますね。

T：では、これらを総合して、今までの学習を全部含めて、増税すべきかすべきではないかもう一度考えてみましょう。

＜記述＞

T：どちらかに手を挙げてください。

増税すべきだ。＜挙手 13名程度＞

T：増税すべきでない。＜挙手 7名程度＞

T：どっちでもない。＜挙手 6名＞

T：ではどっちでもない人の意見を聞いてみましょう。

C28：政府の人が自分のことに使ってしまうのは嫌だけど、国のために使うのであればいい。

T：あと1分だけ書く時間をとるので、自分の意見を書いておきましょう。

予想の段階において、子どもは既習の教育や社会福祉に対する税の使途についての言及が多かった。また、新しいアイデアとして、幸せになると思う使途についても教師から尋ねると、電車代がタダになれば幸せだと答えた。その根拠として、C7の児童がノートに記述していたことは、働いて税金を払っている人が、仕事に行く時にタダになれば、たくさんの納税者が幸せになるからという内容であった。

これらの予想について、教師からの資料をもとに検証させた。

資料1

デンマークと日本の社会保障と教育比較		
	デンマーク	日本
年金	公平性を保たれ、高所得者はもらえない。	65歳まで引き上げ。さらに70歳を越えても受給を選択できるようにする。
介護	すべて国が無償でサービスを提供	介護施設への補助
医療	無料	小学生まで無料（加東市） （地域による）
教育	学校無料・17歳まで子ども手当 （大学生は月から9万円の支給）	高校までの教育費を支援

参照1：デンマークに学ぶ高齢者福祉 http://www.glococ.ac.jp/chijo_lib/118/052-062_A_igari.pdf
 参照2：なぜデンマークは「世界一幸福な国」になったのか 政治体制・社会保障から見る、日本との違い <http://logmi.jp/264806>
 表：授業者作成

C20やC21は資料1から、デンマークが社会保障に重きを置いた政策を行なっていることを読み取り、予想に対して関係していることに気付いている。

資料2

2017年 国の税の「歳入－歳出」			
	デンマーク	日本	ハンガリー
歳入と歳出のバランス	－215億5000万 デンマーククローネ (－3879億円)	－22兆5510億9000万 円	－9575億6000万 フォリント (－5266億5800万円)

参照：世界の経済・統計情報サイト
<http://ecodh.net/>
表：授業者作成

資料2については、資料の作成の仕方に問題があり、多くの子どもたちはこの資料から思考を深めることができなかった。

資料3からはデンマークの投票率の高さと国民の政治への関心の高さを読み取ることができた。しかし、投票率と政治の透明性とはつながっている訳ではなく、子どもたちが政治の透明性と幸福度の関連性を読み取ることが難しかった。

資料3

デンマークと日本とハンガリーの議員への投票率比較		
デンマーク	日本	ハンガリー
投票率 86.3% （過去5回の議員選挙の投票率の平均） ※風のがっこう https://www.sra-dk.com/voter-turnout-rate/	投票率 60.5% （過去5回の衆議院選挙の投票率の平均） ※総務省データ http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendai/betu/	投票率 60.1% （過去3回の議会選挙の投票率の平均） ※Wikipediaハンガリー議会選挙 https://ja.wikipedia.org/wiki/2014年ハンガリー議会選挙

表：授業者作成

最後に、最初と同じように増税すべきかすべきでないかについて自分の考えをもつ時間をとった。すると、「増税すべき」という考えになった子どもが10名程度増えた。

また、「どちらでもない」という考えについては、留保条件を付けて「国のために使ってくれるなら」という意見をもつ子どもも多くなった。ふり返りを見ると、「増税してもいいけど、それで借金が返せたり、国のために使えたりするならいい。でも、議員の不正があるなら、増税反対」、「増税してもいい。しかし、デンマークみたいなみんなどうしが信頼し合える国がくれるわけではない。だから、デンマークみたいに国民どうしのアイデアとかを聞いてよい国をつくっていったらいいと思う。増税してどう使うかを国民と政府と一緒に考えられたらいいと思う」などのふり返りが見られた。

(森清成・吉田繁之・柴田映里・小寺研・土松拓也)

3 読解力形成過程の分析と評価

3.1 学級全体の読解力形成過程

3.1.1 本時における読解力形成過程の分析

本時の目標は、デンマークの税制度を比較することで、税金が高いことのメリットとデメリットを捉え、社会福祉のあり方について考えることをねらいとしている。本時の展開場面では、「消費税が高いのにデンマークの人々の幸福度が高いのはなぜだろう」という学習課題を設定して、資料から学習課題を探究させている。本時における読解力形成のポイントとなるのは、「消費税の高さ」と「国民の幸福度の高さ」の相関関係を三つの資料から子どもがどのように読み解いているのかである。まず、資料1「デンマークと日本の社会保障と教育比較」では、二つの国の社会保障制度を「年金」、「介護」、「医療」、「教育」の四つの観点で子どもに読み取らせている。子どもからは、「学校のお金とか病院のお金が税金で払われているから、無料になって幸せなんじゃないかな」、「デンマークは多分税金で色々なサービスがまかなわれていると思うから幸せ」、「国民が満足するような使い方をしているから満足度が高いと思う」といった意見が出されている。教師は、「国民が満足するような使い方ってどんな使い方かな」という問いを投げかけ、国が国民のために行うサービスについての思考を促している。

次に、資料2「2017年 国の税の歳入－歳出」では、「働いた給料の3分の1がなくなるのはどう感じるか」という問いを教師が投げかけることで、子どもに「税金の高さ」と「国民の幸福度の高さ」のギャップを考えさせている。子どもからは、「消費税を下げしてほしいとみんな言っているのにまた上げたらもっと苦情がくる」、「本当に国民のために使うのなら、増やしてもいいし、もし政府が自分のために税を使うのなら減らすべきだと思う」、「借金はなくそうとしてもなくなる数だから、それなら現状のままでいい」などの意見が出されている。

そして、資料3「デンマークと日本とハンガリーの議員への投票率比較」では、政治の透明度のランキングを提示することで、三つの国の投票率の比較から自分たちが政治にどのように関わっていくべきなのかを考えさせている。教師は、政治の透明度が1位であるデンマークと日本(20位)、ハンガリー(57位)を比較して、税金が高くても政治に対する信頼感が高ければ、国民の幸福度は高くなる傾向を読み取らせようとしている。子どもからは、「デンマークみたいに国民どうしのアイデアと

かを聞いてよい国をつくっていったらいいと思う」、「使い道は国民の投票も入れる。サービスや国民の生活がよくなるような使い方をするなら、増税してほしい」、「増税してもいいけど、それで借金が返せたり、国のために使えるならいい。でも議員の不正があるなら、増税反対」、「デンマークの人は政府を信頼している」といった意見が出されている。

本時の目標では、政治のあり方が税金の使い道と深く関わっており、自分たちも政治に興味をもっていく必要があることを子どもに感じさせることも意図している。それによって、国と地方公共団体の課題を解決するために、税金が集められ、民意が反映された上で、適正に使われるべきものであることを子どもに読解させようとしている。

「知識の構造図」の観点から学級全体の読解力形成過程を分析してみると、本時で教師が設定した事実的知識である「消費税について知っている」から説明的知識である「増税するのは、少子高齢社会による年金・医療・介護にかかる費用が増加していくからであることなどがわかっている」へと思考のプロセスが移行し、概念的知識である「税金は公共のためや社会の問題を解決するために、国民から集められるものであるということがわかっている」という思考へと変容していることがわかる。さらに、三つの国の税制を比較し、グラフや表などから社会福祉や教育への税金の使い方を読み解き、日本の税制をもとに政治のあり方について総合的に判断させている。こうした思考力・判断力・表現力を基盤にして、自分たちの民意を反映させ、政治に積極的に関わっていこうとする力を身につけさせようとしている。

では、子どもの読解力を形成するために本時で教師が提示した資料はどう機能したのだろうか。教師の「概念マップ」と子どもの「イメージマップ」をもとに考察したい。

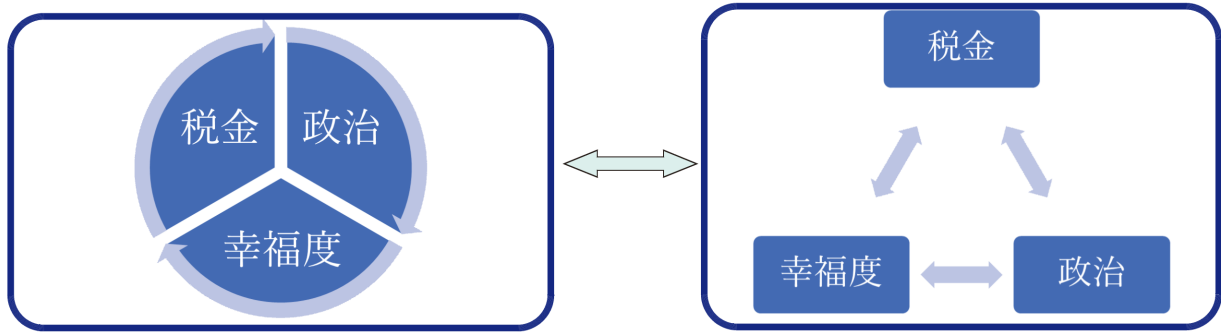
3.1.2 本時における読解力形成と評価

本時において、読解力形成の要となっているのは、「税金」、「幸福度」、「政治」の三つの観点である。図2は、教師の「概念マップ」と子どもの「イメージマップ」をこの三つの観点から示したものである。教師は、子どもの読解力形成を図るために、客観的な知識を類型化し、科学性を重視している。一方、子どもは、主観的な知識が既存の知識として混在し、授業を通してそれらに関連付けていく。本時では、「税金」と「幸福度」の関係を

本時の学習問題：「消費税が高いのにデンマークの人々の幸福度が高いのはなぜだろう」

A：教師の「概念マップ」（科学性の重視）

B：子どもの「イメージマップ」（主体性の重視）



＜客観的な知識の類型化＞ 教師と子どもの社会認識形成の視点のずれ ＜主観的な知識の分散化＞

図2 本時の教師の「概念マップ」と子どもの「イメージマップ」

読み解き、それをもとに「政治」へとつなげていくプロセスがより高次の読解力形成に至る過程となっていた。

資料1では、社会保障と教育の比較を読解の柱としているが、子どもは北欧の国の人口や国土の面積などの基礎的情報を踏まえた上で日本の社会保障制度の比較が十分でなかった面がみられる。国民の福祉を充実させる仕組みがなぜ実現可能なかを考えさせるためには、それぞれの国の持つ実情を正確に把握することが不可欠である。

資料2では、税金は国民のためにどのように使われているのかを深く吟味させる必要がある。国の借金が多いことだけではなく、どのような分野の何に使われているのか、それは適切な使用方法なのかをさらに考えさせ、豊かな国民の生活へとつながる税金の使い方をプランとして提示できるようにすることがより高次の思考となる。資料3では、子どもが主権者として政治のあり方とつながる意識を高め、政治参画へと結びつける学習場面である。国民の「税金」や「幸福度」は、「政治」のあり方と関係があり、「政治」のあり方を変えるのは政治家ではなく自分たちであるという意識を涵養することがここでの学習活動の中心となる場面である。政治への信頼感と主体性を持たせるためにはどのようにすればよいのか。次時の陳情書作成へと続く学習の重要なポイントとなる。

ただ、ハンガリーは社会主義政策から現在の社会体制へと移行しているために、世界についての学習が十分でない子どもにとっては理解するのが難しい国の一つである。こうした国の補足的な情報を教師が提供することで、三つの国を比較する基準を子どもに考えさせることができる。

このように、三つの観点から本時において教師が考える「概念マップ」と子どもの考える「イメージマップ」を分析すると、社会的事象の客観的な知識を類型化して捉えている教師と主観的な知識を分散化して捉えている子どもの社会認識形成の視点のずれが明らかとなる。子どもの読解力形成に合わせてどのようにより適切な資料を提示して継続的な学習活動の改善を図るか検討が必要だろう。

（福田喜彦）

3.2 抽出児の読解力形成過程

本節では、抽出児を中心とした子どものワークシート記述を手がかりに、本単元における読解力形成結果を明らかにする。本研究では、授業ごとにワークシートに本時の振り返りを記入させ、ポートフォリオ的に保存している。ここでは、ワークシートの記述の変遷を分析していくことで、読解力成長過程を検証していく。

3.2.1 個性的な読解力成長と社会認識形成との関係

ここでは、ワークシート記述から読解力成長を分析することができる子ども（A児）の記述を取りあげ、その変容を紹介する（表3）。そして、社会科固有の読解力形成の方法である情報の収集、情報の解釈、推論の省察の三つの段階をふまえ、読解力成長と社会認識形成、価値判断との関係を検討する。

情報の収集とは、「教師の話、資料、聞き取りなどから情報を獲得していること」、情報の解釈とは「教師の話、資料、聞き取りなどから獲得した情報を関連づけていること」、推論の省察を「解釈した内容や解釈の方法を振り返っていること」とする。

第1時に先立つイメージマップづくりの段階では、既有知識として関税をはじめとした税の種類は理解されていた。ただし、クラス全体で見た場合、諸税について言及ができていたのは15名と全体の半数程度であり、第1時において授業者が税金の種類について情報を収集、整理させる方針を採ったことは妥当であったと考えられる。

第1次では、メインとなる活動高額納税者クイズ及び日本の税収を知る活動を通して税金に対する好悪、父親の納税額について関心を寄せている。授業者が意図する税への興味をもたせることについて達成できていることが読み取れる。このことにより第3時に出された問い、「税収は約58兆円もあるのになぜ増税する必要があるのか」をめぐる疑問を生成させた際、「58兆円もあるのになぜ増税するんだー！」と驚く様子に結びついている。ただし、この段階では高額納税者ランキングと消費税率、税収それぞれについての関連についての言及はなく、3.1.2でふれた、知識の分散化が見て取れるとともに、情緒的な記述にとどまっている。子どもに興味をもたせるために使用した資料と、税についての疑問を促す問いとを接続する授業者の働きかけが必要であったと考えられ

表3 A児による振り返りシートの記述と読解力の成長

時	振り返りシートの記述内容（情報の収集：破線、情報の解釈：実線、推論の省察：波線）
プレイ メー マップ	「税についてのイメージ」 高い。関税。酒税。法人税。消費税。住民税。地方消費税。所得税。たばこ税。たばこ特別税。自動車税。公務員の給料。確定申告。ないといけな。公共サービスが無料で受けられる。
第1時	仕事をしてお金をもらっているのに、国に税金としてとられちゃうのは何かいやだなーと思った。お父さんの会社はどれくらい？（父親は製薬会社勤務）
第2時	所得税は人（収入）によって金額が変わっていて、1兆近く払っていることにびっくりした。
第3時	58兆円もあるのになぜ増税するんだー！東京オリンピックとか？でも年過ぎてる…。貧しい人のことを考えているのか？？税金はないと困るけど、ありすぎても困る！
第4時	増税はたくさん理由があるから増税される。でも、国が予算をむりやり使うのもどうかと思う。
第5時	増やさない＝現状維持 税金がどんなことに使われているのか政治家が税金で不正なことをしているんだったら、ちょっといや。 今日の授業は難しい言葉がたくさん出てきた。社会保障給付費と一緒に少子高齢化の資料もあったらいいなあ。
第6時	国家レベルの話になってきた！もしかすると、国には国の裏事情があるのでは…？（生々しい話）
第7時	もつともうけたら全て解決すると思う。けど日本が輸出できるものって工業製品だから、人手が足りないし、作るのにもお金がかかるし。お金がどこからかいっぱい入ったらいいのになあ。
第8時	ハンガリーの人たちは不満がめっちゃいっぱいありそう。日本と似てる？一人あたりのお金の資料があったら、もってくる！ハンガリーの予算みたいなのが、あったらいいなあ。
第9時	ハンガリーは豊かな国ランキング49位！ハンガリーは豊か度131位ハンガリーは豊かでも貧乏でもない。
第10時	増税してもいいけど、それで借金が返せたり、国のために使えるなら、議員の不正があるなら増税反対。
第11時	自衛費に使っているなんて思っていなかった。所得税とかたばこ税・酒税を増やすっていう意見はいいと思った。国はたぶん借金を返さなきゃいけないというのは多分わかっていると思うけど、裏事情的な何かがあると思う。疑いの目がある。
第12時	増税する税の一例として消費税を挙げる。消費税増税の理由は少子高齢化が進んでいるからだということを調べた。でも実際に高齢者は増税すると生活が苦しくなる人もいと聞いている。それに、消費税は貧しい人も裕福な人でも平等に納められるから、そうすると貧しい人の暮らしはもっと苦しくなってしまうから、裕福な人が払う所得税を増税したり、たばこ税や酒税を増やして健康な人を増やしていくことがいいと思う。

る。

第2次第4時では、第3時で示された問いの解決を巡って、税収の移り変わりや社会保障費の推移を示す資料から財源不足や税収の安定化にかかわる問題があることを読み取っていった。A児は「増税はたくさん理由があるから増税される（傍点筆者）」と振り返りに記述していることから、資料の読解により視点の増殖がなされていることが示唆される。しかし、「なぜ、増税するのか」の理由について、「たくさんある」ことはわかっても、それを詳述できているわけではない。詳述されない要因は例えばB児の記述「国にはたくさんの増税する理由があってどれが理由かわからない」に端的に表れている。つまり、増税する理由として子どもたちが読み取っているのは、財源不足や税収の安定化といった抽象度が高い内容であり、この段階では支出が増大せざるを得ない原因との関連付けに至っていないと考えられる。

続く第5時では、政府の予算についてその具体となる資料を探索し読解させていくことで、増税する理由について個々人の考えを導き出す活動が行われている。A児は社会保障費に着目している。社会保障費が増えているのは少子高齢化が原因となっているのではないかと推論し、少子高齢化に関わる資料を求めている。授業者は予想を仮説に高めるため資料の収集を支援し、A児は少子高齢化に関する資料を解釈することで、これ以上(支出を)増やさないと、不正はいけないといった税金の使い方

に関する問題を提示することができている。増税に関する資料の解釈は第8時におけるハンガリーの税制との比較の場面で生かされている。ハンガリーにおいては日本と比べて消費税率が高いことで不満が多いであろうことを推論した上で、ハンガリーの予算の実際や一人あたりの納税額といった新たな情報を探索して問いを拡張し、比較対象を増殖させようとしている。

第3次第10時では幸福度と税金との対比から、改めて日本の税制の問題について想起している。そして、税金がどのように使われるべきかについて「借金を返せたり、国のために使われるなら」増税してもよいと、留保条件を付けた判断に至っている。第2次で生成された税の使い方に関する推論を省察し、総合が図られていることが読み取れる。授業者が意図する、対比により税金がどのように使われるべきか考えさせることは成功していたと言える。

第4次、意見書の作成に際しては、増税に関する留意点「高齢者は増税すると生活が苦しくなる」をふまえた上で、限定的な増税を提案している。これまで資料から解釈してきたことを総合し判断を下していることから、社会問題の解決に即した合理的意思決定がなされていると言える。

3.2.2 読解力形成と評価

ワークシートの分析をとおして、次の三点について読み取ることができた。

第一に、他国の政策を取り上げ対比させることで、国の政策を吟味検討させることに成功しているという点である。先に述べたように、消費税率が高いハンガリーの政策、高い満足度を取り上げることで、身近な税の税率が上がることにネガティブなイメージをもつであろう子どもたちの推論の再検討を促していた。情意的に増税に反対する見解から、留保条件を付けた増税の提案へと判断を変化させたという点で読解力を向上させていることが示唆される。ただし、留保条件付きの判断に至った子どもは10名にとどまっていたことから、こうした留保条件を伴った判断は必ずしもクラス全体に共有されていないと考えられる。

第二に、授業者は子どもが調べたいと考えた内容をふまえて、適切に資料を提示する、あるいは資料の存在を示唆することで、推論がある程度拡張されたことが読み取れる。これはA児に限らず、税の使われ方や徴税方法といった税の仕組みだけではなく、投票率との相関関係を国家間比較により類推させることを取り入れたことで、政治と税とを関連付けた思考を促したという点で意義がある。しかし、3.1.2で指摘されたように、基礎的な情報を十分にふまえることなく他国との対比をしたことで、B児の「どれが理由がわからない」といった混乱を引き起こしている。読解力形成に至る資料提示の在り方を再考していく必要がある。

第三に、ワークシート記述から子どもたちが学習の当初に抱いていた疑問は必ずしも解決されていないことを意味する。例えば、社会保障費の増大に対する答えはでないまま税に関する陳情に至っていることが端的に示している。一税制の問題から、社会問題を見据えていくための学習内容改善と手立ての充実を今後の課題としたい。

（山内敏男）

3.3 読解力形成のための授業構成と評価

本単元は、①日本の税金、②消費増税について考える、③日本の財政について考える、という3次構成である。財政のはたらきについて、子どもにとって身近な消費税を切り口に理解させ、さらに主権者として税の使途などについて自分なりに考えさせようとしている。税の使途について意見文を書く活動を通して、税の使い道を決めることが政治であることを、主権者の目から考察させる展開は、社会科の目標に即している。6年生の学習では、納税が国民生活の向上と安定を図るための義務であることを、具体例を通して取り扱う。社会科教育は主権者を育てる教育であるから、義務と対応する社会への適応のみを扱うのではなく、税の使途の監視や修正提案、政府の機能の大きさがどうあればよいのかを吟味する国家への抵抗の側面からも教育内容を設定すべきである。本単元では、福祉国家であるデンマークなど他国の政策を取り上げて対比させることで、日本の政策を吟味しやすくする構成をとっている。

一方、3.1.2で指摘された授業者の「概念マップ」と子どもの「イメージマップ」のずれや、3.2.2で指摘された基礎的な情報を十分に踏まえることなく授業が展開され

たため、子どもにとっては知識の連関性が弱いままで「どれが理由かわからない」という混乱を引き起こしたことは、読解が深まらなかった証拠とも考えられる。税の使途を社会の情勢を踏まえて具体的に提案したり、歳出内訳を批判的に検討したりするために、情報を解釈して根拠とできるようにすることが社会科固有の読解力形成につながる。

これらを踏まえて、この単元の構成を改善する方策を1例述べる。それは、本単元のゴールを、主権者の立場から歳入と歳出の規模と内訳の在り方に言及させることとし、その評価法を具体的に想定することである。本単元は、日本の財政のはたらきを理解し、適切な歳入と歳出の関係を主権者の立場から考えさせようとするのがねらいであったはずである。目標では、社会福祉、社会資本整備、教育などの課題解決のための予算に言及されていることから、歳入と歳出の円グラフを修正させるなどの作業と合わせて、その根拠を意見文として書かせる必要があったろう。そして、この意見文を見取るループリックが具体的には示されていない。ループリックを設定すれば、授業者自身が読解力の形成を意識した単元構成や授業デザインが可能になる。ではどのようなループリックが必要なのか。大きくは、社会への適応（納税）と国家への抵抗（福祉水準の設定と税の使途監視）を観点とした意見文が書けるように、資料の読解レベルを組み込んだもののなかのだろう。単元の目標と整合した特定課題ループリックの開発が必要である。

（吉水裕也）

4 小括—成果と課題—

社会科授業において、主権者意識を育てることは、大切なことである。主権者としての国民は、当然、義務と権利を有しながら、国家への適応と抵抗について意識することが必要である。また、主権者教育は、選挙や政治のことだけを教えることではない。まして、選挙の際に政党や政権、メディア等が、主要争点と定めたような政策分野を知ったり、批判したりすることでもない。大切なことは、まず、自分自身の生活を改めて見直し、現状の課題や理想とのズレやギャップに気づくことが大切である。そして、そのズレやギャップの原因になっているのは、選挙や政治につながっているということを知り、必要に応じて、選挙だけではなく、身の回りで、自分ができに参画して主権者としてふさわしい行動を取ることが目的になってくる。

今回、世界の幸福度ランキングを取り入れ、消費増税という国の政策と幸福度との関連性を追究することを試みた実践である。

幸福度ランキングとは、「所得」、「健康と寿命」、「社会支援」、「自由」、「信頼」、「寛容さ」などの要素を基準に、国連が毎年発表しているものである。2018年、日本は、54位にランクされている⁽³⁾。幸福の感じ方や生き方に対する価値観は、個人差によるところが大きい。国家や民族、自然、文化、教育、経済力などの他、社会制度や医療・福祉の発達度などの指標によって、個人の幸福

度 well-being が違う。本実践が深く追究できたという手応えがなかった原因は、この幸福度ランキングと消費税の相関関係を求めたところに無理があるのではないかな。しかも、関係性を追究するための資料が不足している。そのことは、結果として、子どもの読解が深まらなかった原因にもなっている。消費増税や国の政策そのものを考えるのなら、国の歳入と歳出のグラフ等を示して、税金の用途を徹底的に吟味してみるプロセスが必要である。

ただ、幸福度ランキングを取り入れた意義はあるのではないかな。幸福度ランキングをきっかけとして、個々に「幸せとは何か」と哲学的に考えてみることも社会科では必要である。つまり、今回取り上げたデンマークや同じ北欧のスウェーデン、フィンランドなどの国は、総じて幸福度ランキングが高い。それは、なぜなのだろうか。その理由を追究してみることも立派な社会科の学習に成り得るのではないかな。安直に政治－福祉－税金などの関連性を追究するだけでなく、幸福度が高い理由を徹底的に探ることで、それぞれが思う幸福とは何かを考えるきっかけにすればよい。実践分析において、教師と子どもの認識のズレや子どもの知識の関連性が低いこと、読解が深まっていないことなどの指摘も、消費増税と幸福度との関連性のみの追究で完結していることに無理があるのである。

これまで、10年間、大学教員と附属学校の教員が、社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析という研究テーマを設定して、協働で授業づくりに取り組んできた。附属学校の教員は、人事異動があるため、3～4年で転勤されてしまう。また、校内の人事によって学年が配当されるため、バランスよく各学年の実践を対象とすることもできなかった。社会科とは何か、社会科授業をどうすればいいのかなどと考え始めてくる段階になると人事異動になるので、毎年同じ事の繰り返しになってしまったのが残念なところである。しかし、本研究は、附属教員が、自己成長を目指して行う自分サイズの調査研究、つまりアクション・リサーチ action research でもあった。それは、自ら行動を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいてリフレクションするリサーチである。附属小学校において、定期的な会合をもちながら、大学教員は、適宜、理論的なサポートを行う。附属学校の教員は、日々の授業実践を繰り返し行いながら、教材開発に努め、授業実践に結びつけることができた。その研究成果は、社会系教科教育学会において共同発表を行い、本誌上でも公開をしながら、その結果について、大学教員と再度協働で分析し、成果と課題について認識を共有できた意義は大きい。

(關 浩和)

【註】

- (1) 政治に関する FNN 世論調査 2016/7/16～7/17
https://www.fnn-news.com/yoron/inquiry_list.html
- (2) マイケル・ブース『限りなく完璧に近い人々 なぜ北欧の暮らしは世界一幸せなのか』角川書店、2016年。

- (3) 幸福度ランキングとは、国連が156カ国を対象に、調査を行い、2012年から発表されている。各国で約1,000人に対して調査が行われており、かなり精度の高いランキングとされている。2018年の世界幸福度ランキングのベスト10は、①フィンランド ②ノルウェー ③デンマーク ④アイスランド ⑤スイス ⑥オランダ ⑦カナダ ⑧ニュージーランド ⑨スウェーデン ⑩オーストラリアとなっている。ちなみにアメリカ合衆国は18位、日本は54位、ロシアは59位、中国は86位となっている。

【引用文献】

- 資料1 (1) 猪狩典子 (2013) デンマークに学ぶ高齢者福祉－政策イニシアティブが生み出すユーザー参加型社会, interplace118, pp.52-62.
http://www.glocom.ac.jp/chijo_lib/118/052-062_A_igari.pdf
- 資料1 (2) 寺田和弘 (2018) なぜデンマークは“世界一幸福な国”になったのか 政治体制・社会保障から見る, 日本との違い <http://logmi.jp/264806>
- 資料2 世界の経済・統計 情報サイト <http://ecodb.net/>
- 資料3 (1) 風のがっこう <https://www.sra-dk.com/voter-turnout-rate/>
- 資料3 (2) 総務省データ http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/
- 資料3 (3) Wikipedia ハンガリー議会選挙 2014年ハンガリー議会選挙 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- なお、web ページについては、2018年10月1日時点で公開されていることが確認できている。